

ヨーロッパ中世の文字遊び・名前・暗号

Spiele mit Buchstaben, Name und Verschlüsselung im europäischen Mittelalter

岡 地 稔

Minoru OKACHI

要 約

中世ヨーロッパにおいては文字を用いての「遊び」や、文章の中に別の意味をもつ言葉を折り込む言葉遊び——アクロスティック（日本の「折句」に相当）——が、知識人たる聖職者層を中心におこなわれた。本稿ではそうした「遊び」を、とくに名前にかかわるものを対象として、紹介した。まず名前のつづり・アルファベットを組合せて図案化したモノグラムを、国王文書での実例から紹介し、ついでラバヌス・マウルスの『聖十字架の礼賛』を取り上げ、ラバヌスが、作者たる自分の名を詩文の中に織り込んでいる「アクロスティック」の実例を紹介した。

「アクロスティック」は他面、暗号としても機能するであろうが、しかし、中世初期の暗号についてはあまり知られていない。だが、修道士たちの間では「クロップルーネ」と呼ばれる、たたくことで表す秘密の言葉・暗号が実際に用いられていた。これに関して、ヨハネス・ドゥフトの研究に依りつつ、11世紀の聖職者・学識者エッケハルト4世が「クロップルーネ」を通して、落書の類にひそかに自分の名前を記した事例を紹介した。

はじめに

本日は ZOOM での最終講義へのご参加、どうもありがとうございます。

最終講義といいますと、私などは自分の恩師・先輩方のそれを思い起こし、すごくまじめで堅い話を、居住まいを正してうかがったと記憶しております。ですが、本日は、日曜の午後、ZOOMでのやり取りということで、堅くないテーマでお話ししたいと考えます。気軽に聞いていただければ幸いです。

題して、「ヨーロッパ中世の文字遊び・名前・暗号」、です。

文字遊び、名前、暗号、と題しましたが、文字を使った遊び、なぞなぞの類について、3つ、お話ししようと思っています。いずれも名前に関するもので、タイトルに「名前」と入れた所以です。1つ目、2つ目の話は比較的知られていることがらかと思いますが、3つ目の話は、あまりというか、

ほとんど知られていないことで、これが本日のメインの話になります。
それでは本題に入ります。

1. モノグラム

1つ目。中世の文字遊びといえば、遊びではないのですが、モノグラム Monogramm, つまり名前のつづり・アルファベットを組合せて図案化したものが、まず思い浮かぶかと思います。

モノグラムは古代からすでに見られるのですが、中世では国王たちが発給する文書の末尾に、本人がサイン代わりに描いたものがよく知られます。本人が、というのは、文書自体はたいてい書記が書くので、この部分のみ本人が記す、ということです。実例をお見せします(図1)。オットー大帝(†973)の国王文書です。左下に記号のように見えるものがそれで、OTTOを組合せたものです。モノグラムというのは日本の戦国武将の書状に見られる花押のようなものですね。

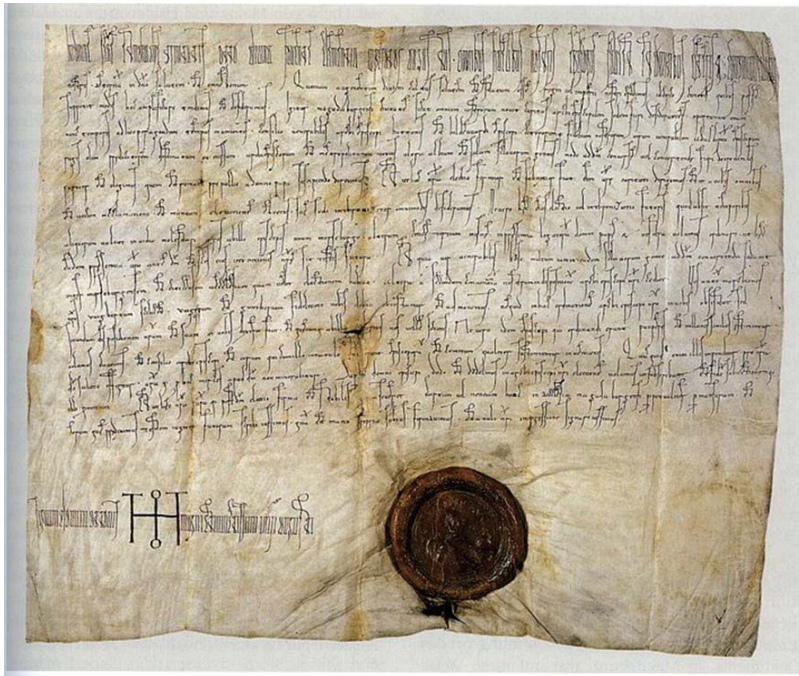


図1 オットー1世(大帝)文書(968年)

もう一つ二つ、例をお見せします。カール大帝(†814)のモノグラム(図2)。KAROLVSを組合せたもの。真ん中のダイヤ部分がA・O・Vを一つにしていますね。なお、VはここではUと同じです。このことはあとでお話しします。ついでハインリヒ2世(†1024)のモノグラム(図3)。HEINRICVSを組合せたものです。

モノグラムの話をする、自分の名前をモノグラムにしようと思う人が必ずといっていいほどいらっやいます。実際やってみるとおもしろいかもしれません。

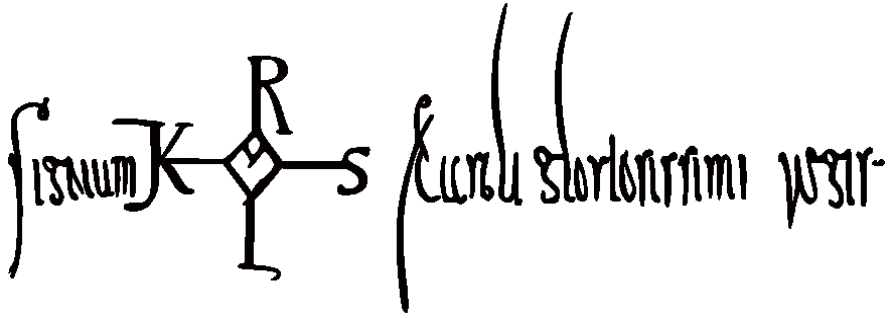


図2 カール大帝文書の署判におけるモノグラム



図3 ハイน์リヒ2世のモノグラム

2. 折句 (アクロスティック)

さて、日本の和歌などに、五七五七七の各句の頭の字を並べると意味のある語が出てくる、折句という遊びがあります。例えば在原業平の「かきつばた」を折り込んだ「から衣きつつなれにし妻(つま)しあればはるばる来ぬる旅(たび)をしぞ思ふ」(伊勢物語・九段)はあまりにも有名ですね。2つ目として、この折句に似た、遊び心のある例を紹介します。

9世紀前半の、聖職者であり学識者でもある、中部ドイツのフルダ修道院の院長、さらにはマインツ大司教であったマグネンティウス・ラバヌス・マウルス (Magnentius Rabanus Maurus, c. 780-856, ちなみにラバヌスのみが彼の本名で、あとはニックネームないしは文飾です)。彼が書いた書物に『聖十字架の礼賛』(De laudibus sanctae crucis) という詞華集(詩文の選集)があります。この書物の原本は失われているのですが、早くからいくつか写本が作られていまして、ここではウィーン本の復刻本をお見せします(ZOOMで提示)。

所々に絵が描かれたページがありまして、中でもルードヴィヒ敬虔帝(†840)を、キリストの戦士として描いたものが有名です。ウィーン本の復刻本でお見せします(ZOOMで提示; 図4)。背後の点々のように見えるのが、文字を書き記したもので、敬虔帝をたたえる詩文が書かれていま



図4 ルードヴィヒ敬虔帝（ウィーン本 De laudibus sanctae crucis）

す。ちなみに書き始めは REX REGUM（王の中の王）。要はおべっかですね。

さてこの書物の中ほどに、つぎに紹介する詩文のページがあります。ここでは先ほどのウィーン本と、ヴァチカン本で、紹介します（図5、図6）。注目してもらいたいのは、縦横7文字間隔で規則的に並ぶ、目立つように記された36文字です。

MAGNENTIUS HRABANUS MAURUS HOC OPUS FECIT. 分かち書きして、また小文字を用いて書き直しますと、Magnentius Hrabanus Maurus hoc opus fecit となります。意味は「マグネンティウス・ラバヌス・マウルスがこの作品を創った。」つまり作者たる自分の名を、詩文の中に折り込

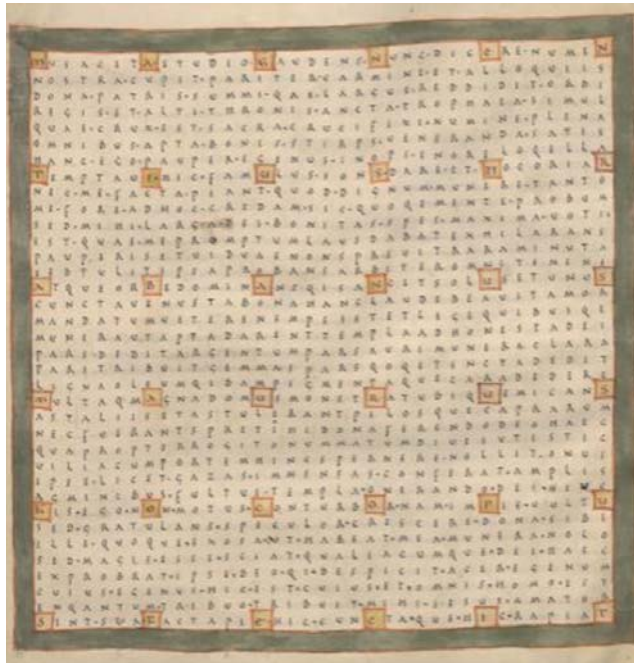


図5 Magnentius Hrabanus Maurus hoc opus fecitの「折句」
(ウイーン本 De laudibus sanctae crucis)

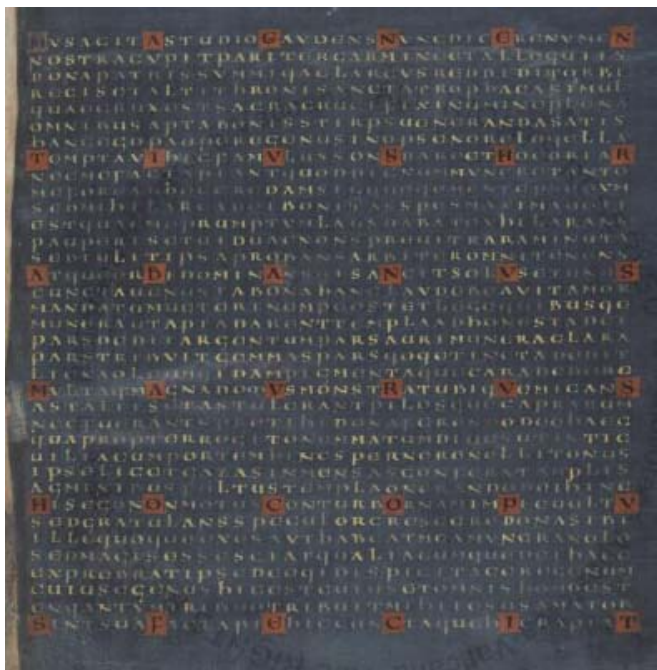


図6 Magnentius Hrabanus Maurus hoc opus fecitの「折句」(ヴァチカン本 De laudibus sanctae crucis)

んでいるわけです。

ただ、さりげなく挿入しているのではなく、どうだ、すごいだろう、うまいだろう、といった得意げな様子が感じ取られますが、要は、遊びということです。

遊びということかというと、仮にこの36文字を目立たせることなく、他の文字と同じように記し、例えば別のページに「7」という数字を示したならば、そして送り手、受け手が縦横X文字間隔で読む、と了解していたなら、それはもう暗号文になりますね。

そこで、3つ目——今日の本題ですが——が、文字遊び、なぞなぞ、というか、ある暗号の話です。

3. 暗号

イギリスのサイエンス作家サイモン・シンは、その著書『暗号解説』において、ヨーロッパ中世での暗号についても触れています。シンはその時代、暗号を研究する雰囲気があったのは、唯一修道院であった、といいます。なぜ修道院かといいますと、修道士たちが、旧約聖書の隠されたメッセージを読み解こうとして、暗号に関心を寄せてきたからだ、というのです。そして暗号について書かれたもっとも古い書物は13世紀、フランススコ会修道士であったロジャー・ベーコンの『秘密の技法と魔法の無効性についての書簡』であり、そこにはメッセージを秘密にするための7つの方法が説明されているとのことでした。

本日お話しする3つ目の話は、まさにシンのいうように中世の修道院において、修道士が実際に記した「暗号文」の話です。11世紀の例です。なおロジャー・ベーコンよりもずっと以前、9世紀後半に、非常に簡単ではあるものの、暗号について記したものがあることを、合わせてお示しいと思います。

ご紹介する「暗号文」は、スイスの研究者ヨハネス・ドゥフト Johannes Duft が1985年に発表した論文の中で取り上げているものですが、日本では紹介されていないようですので、本日ここで改めて紹介したいと思う次第です。実はこの暗号文、ドゥフトよりもさらに150年ほど前の1844年に、ハインリヒ・ハッテマー Heinrich Hattemer という言語学者が解いているのですが、彼の答えはヨハネス・ドゥフトの関心からすると「正解」ではないのです。わけの分からないことをいつているみたいですが、あとで説明しますので、いつている意味を分かっていたらと思います。

ヨハネス・ドゥフト(1915-2003)はカトリックの司祭であり、スイスの大学や、とりわけザンクト・ガレン修道院附属図書館 Stiftsbibliothek St. Gallen の研究所で活躍した研究者で、とくに中世初期のザンクト・ガレン修道院の歴史、それと関連するカロリング朝期フランク王国、オットー朝・ザーリア朝期ドイツに関する歴史研究で、知られます。

本題に入る前に、まずは今名前を出しましたザンクト・ガレン修道院のことから確認しておきましょう。ザンクト・ガレン修道院は、ドイツとスイスの国境をなしているライン川上流のボーデン湖の南に所在し、今日スイスの、その名もザンクト・ガレン州の州都ザンクト・ガレンの中にあります。ですが、都市も州も、いずれもこの修道院、ザンクト・ガレン修道院から発展したものです。

ザンクト・ガレン修道院はカロリング朝フランク王国の時代に王権の保護を得て発展し、つづくドイツのオットー朝・ザーリア朝の時代には帝国修道院として大きな勢力を誇ります。多くの有能な修道士を輩出し、彼らの活動、とりわけ古代以来の膨大な文献の収集・保存・写筆(写本の制作)は、

近隣のライヘナウ修道院とともに、中世初期における文化財の保存・継承に、否、「文化」の保存・継承に多大な貢献をしています。修道院附属の図書室（図書館）はこの時代の文化センターといえる存在です。今日でも、附属図書館は中世以来の、膨大な蔵書で知られます。また、この図書館を含め今日見られる18世紀に建設されたバロック様式の修道院（建築物）は、1983年にユネスコの世界遺産に登録されています。

さて、11世紀のザンクト・ガレン修道院の修道士の一人に、エッケハルト4世 Ekkehard/Ekkehart IV. (980頃-1057頃) という人物がいます。「4世」というのは、彼以前に、ザンクト・ガレン修道院に、同じ名前の有名な（名を残している）修道士が3名いて、今日、古いほうから1世、2世、3世、と呼んでいるからで、血縁関係があるかどうかは不明ですし、彼自らは4世と名乗っているわけではありません。

彼エッケハルト4世は、先ほどのラバヌス・マウルスもそうでしたが、神学・歴史・文学・音楽、と多分野にわたって活動し、数多くの著作をものしています。われわれ歴史研究者には、それらのうち、『ザンクト・ガレン修道院事蹟録』（Casus Sancti Galli）がよく知られています。これは、9世紀末から、10世紀第3四半期、ちょうどオットー大帝のなくなる時期までの、ザンクト・ガレン修道院の歴史を記したもので、その時代を知る貴重な叙述史料となっています。

ところで、このエッケハルトですが、今日、研究者たちが彼のことを記すさいに、Ekkehardとも、Ekkehartとも記されます。ヨハネス・ドゥフトの抱いた疑問は、ずばり、エッケハルトは自分ではどう書いたのだろうか、Ekkehardか、それとも Ekkehartか、というものです。

この時代、書かれる言葉は主にラテン語です。中世の時代、書かれる言葉、読まれる言葉は、古代ローマ人の用いたラテン語で、本人が日常使っている言葉（後のドイツ語、英語、フランス語、等々）は文字にしたためられて使われることは、あまりありません。そして名前などの固有名詞もラテン語の形にして書かれます。男性の名前の場合、たいいてい末尾に「ーウス」(-us) が付く形で書かれ、「ート (ウ)」(-t) の音で終わる名前は、「ートゥス」(-tus) とも、また「ード (ウ)」(-d) の音で終わる名前と同様に、「ードゥス」(-dus) とも、書かれます。例えば、コンラート（今日ふつう Konrad とつづります）は Konradus, といった具合にです。エッケハルトの場合、書かれているものを見ると、たいいていはラテン語形で Ekkehardus と書かれています。したがって、彼の名が「エッケハルト」であった可能性も、「エッケハルト」であった可能性もあるわけです。

エッケハルトは自分ではどう書いたのか。Ekkehardか、それとも Ekkehartか。この問いかけは、しかしながら、ある意味で、あまり意味がありません。

というのも、この時代、ほとんどの人は読み書きができず、自分の名前を書くこと自体あまりなく、書くのは、読み書きできる人たち、すなわち聖職者がほとんどで、彼らにあっては人の名前を、自分に聞こえたままに記します。例えば先ほどのオットー大帝も、たいいてい Otto と記されますが、Oddo と記す人もいます。オットー大帝の弟ブルンも、Brun とも、Prun とも記されます。万事この調子ですから、どちらが正しいか、という問いかけ自体があまり意味がないわけです。人名に関しては、正しいつづりはないのです。今日、一つの名前のつづりにいくつかのヴァリエーションが見られるのもこの意味では当然のことです。例えば、シュミットという名は、Schmid 以外に、Schmidt（わざわざシュミット dt などといって、聞く人につづりを説明したりしますね）、Schmit, 等々、またマイヤーは Mayer, Maier, Meyer, 等々、といったように。

それでもヨハネス・ドゥフトはこだわります。エッケハルト自身は（ラテン語形で書かなかったなら）自分の名前をどう書いたのだろうか、と。

ドゥフトはエッケハルトが書いたものに当たります。エッケハルトの作品は、多くが写本で伝わり、自筆と考えられるものはそれほど多くはありません。

彼の作品の中で、まず写本では、エッケハルトという名前は、先ほどもいいましたようにラテン語形で、Ekkehardus (Ekehardus, Ekhardus) と書かれますが、一部、ラテン語形の表記ではない Ekkeharth, Ekkehart というつづりも出てきます。また Ekk, Ek, Ekkeh という省略形も出てきます。

自筆作品の中では、Ekkehardus の他、省略形の Ekk, Ekh が出てきます。

ラテン語形の表記でない場合、t が優勢かな、とも思われますが、それを伝えるものが写本に少なく、決定打はありません。

そうした中、ヨハネス・ドゥフトはザンクト・ガレン修道院の附属図書館に遺された膨大な文献の中から、エッケハルトの自筆であると鑑定されているある一葉を取り上げます。それは5-6世紀のキリスト教史家エウギピウス Eugippius の著作の476頁から成る写本 Liber Eugippii vol. I magnum (Codex 176, 9世紀, 羊皮紙, 476頁, 42×28-28.5cm。写本それ自体は9世紀のもですが、11世紀のエッケハルトらの注釈や訂正が書き込まれています)の裏表紙の裏に張り付けられた一葉 (Rückspiegelblatt, [英] Rear paste-down, 日本の書冊用語での「効き紙」「力紙」の箇所に相当) に書かれたものです (図7-1~7-2)。ドゥフトは論文に、問題の一葉の下半分のみ、モノクロ写真を載せているのですが、テキストとしての説明はほとんどしていません。しかしながら、幸いなことに、今日、ザンクト・ガレン修道院の附属図書館の所蔵する手稿本はデジタル表示化が進み、インターネット上で公開されています。フルカラーで、細かいところまで見て、確認できますので、ここでお示ししたいと思います (図7-3)。

この一葉の上部は、文章の練習書き、覚え書のようなものが、丁寧に書かれています。中ほどには、2人の人物、一人はT字形の標 (しるべ) をかついでいるところ、もう一人はプラカードのような大きな看板をもって歩いている様子が、さながら挿絵のように、もっといって漫画チックに、描かれています。さらにその下に波線が引かれて、その波線の下、一葉の下半分の部分には、1行が6つ (hexa) の韻脚からなる詩、6歩格 Hexameter の形式の詩が書かれています。

詩の内容は、Crimalt という名の修道士 (3か所に名前が出てくるのですが、残念ながらこの名の修道士を同定することはできません) をからかったもので、背後に大きな甕が描かれ、彼の前ではいっぱいにしたどんな甕も確か (安全) ではない、といった内容です。風刺、からかいの詩 (Spottgedicht / Schmähers) で、史料的价值はほとんどありません。

さて、この裏表紙の裏の一葉自体には、誰が書いたのか、記名はありません。今日、研究者たちは筆跡や、その他の状況証拠から、記した人が、この写本に注記を書き加えているエッケハルト4世その人であると判断しているわけですが、それではエッケハルトの筆になるこのからかいの詩は、誰が作ったのでしょうか。エッケハルトの自作でしょうか、それとも誰かの作品を記したのでしょうか。

この詩は、ドゥフトによると、エッケハルトの作品に特徴的なレオ詩脚 leoninischer Hexameter の形式で書かれており、作者がエッケハルト自身である可能性が濃厚なのですが、「風刺詩」など



図 7-1 Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 176 : Eugippius, Excerpts from Augustine. Commentaries by Ekkehart IV., Front cover/Spine/Back cover



図 7-2 Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 176 : Eugippius, Excerpts from Augustine . Commentaries by Ekkehart IV., p. 476/Rear paste-down

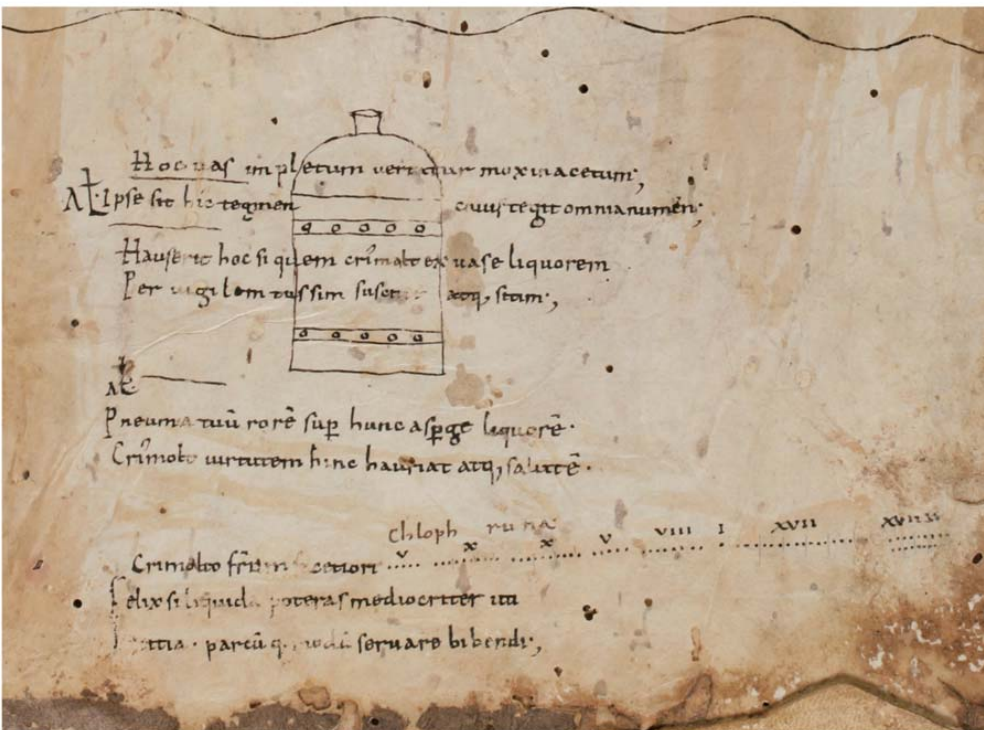


图7-3 Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 176, Rear paste-down (部分)

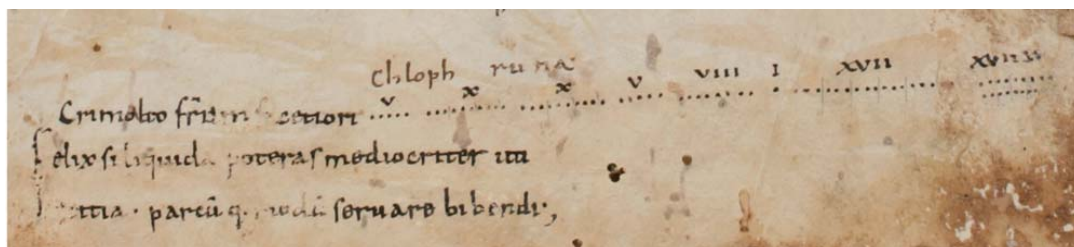


図7-4 Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 176, Rear paste-down (部分)

「落書」の常として、匿名です。しかしそれでも作者としては、練習書き、覚え書の類は問題外でしょうが、自分の作品には、風刺詩であっても何とか自分の名を残したいと考えるのは、ある意味自然のことかと思います。作者が、自分がこれを書いた・創った、ということをごどこかに書き記しているのではないか(写本などでも、写筆者がこっそり自分の名前を記すことは、まああることです)、——ということでハインリヒ・ハッテマーが、そしてドゥフトが目にしたのは、詩の下方右に描かれている「点々」の部分です。

改めて詩の部分を見てみましょう(図7-4)。この詩の、下から3行目の右に、点々が書き連ねられていますね。ドゥフトはテキストとしての細かな点は述べていないのですが、行間隔や、全体のおさまりから見て、これらの点々はあとから付け足されたと思われます。点々の上にはローマ字、というより、「・・・・」の上にV、「・・・・・・」の上にX、などがありますから、明らかにローマ数字が書かれています。そしてローマ数字の配置からして、これらのローマ数字は点々よりあとに書かれたと考えられます。さらにその上に“chloph runa”と書かれています。ハインリヒ・ハッテマーによると、この“chloph runa”の部分は、点々とローマ数字の部分黒インクで書かれているのに対し、青みがかかったインクで書かれている、といわれるのですが、実際デジタル版で見るとその通りで、おそらくこの部分はあとから書かれたかと思われます。書体からすると、この部分も書き手は同じ、つまりエッケハルトであるように思われます。また、よく見ると、点々の中に区切りにしたと思われる細い青インクで書かれた線が見えます。これはあとから点々の数を数えたか、確認したかと思われるかと思われます。これをおこなったのがやはりエッケハルトかどうかは、何ともいえませんが、注目したいのはこの“chloph runa”という言葉です。

“chloph”というラテン語はなく、これは実は当時のドイツ語(古高ドイツ語)で、今日のklopfen(たく)という動詞につながります。例えば現在のドイツ語のKlopfzeichenはklopfenとZeichen、つまり「たたくこと・ノックによる合図」の意です。一方、“runa”はRune(ルーネ文字、ルーン文字)に当たります。つまり現在のドイツ語に直すと“Klopf rune”(以後「クロップルーネ」と記します)ということになります。

ルーン文字は古代のゲルマン人が用いた表音文字で、次第にラテン文字(ローマ字)に取って代わられるようになり、中世に入ると北欧以外ではほとんど用いられなくなった文字です。すでにその中世の時代に、ルーン文字は古めかしく神秘的な文字、謎めいた文字と見られ、呪術的な用途に用いられてきました。今日でも、敢えて商標やロゴなどで用いることがあります。例えばブルートゥースのロゴは(ブルートゥース自体が10世紀のデンマーク王、ハーラル青歯王のあだ名から取っています)ハーラルのHと、ブルートゥースのBの、ルーン文字での組合せでできています。

それでは「クロップルーネ」とは、どういう意味でしょう。先ほど Klopzeichen は「たたくこと・ノックによる合図」と、紹介しました。rune が呪術的、謎めいた文字、ということですので、「クロップルーネ」も「たたくことで表す秘密の言葉、暗号」くらいの意味と思われます。このことを確認させる史料があります。

ザンクト・ガレン修道院の附属図書館に遺されている9世紀後半の、様々な文章を集めた、ある手稿本 (Codex 270, 9世紀後半, 羊皮紙, 総68頁, 20-20.5×13.5-14cm [図8-1]) の中に、おもしろい一葉があります。ルーン文字について述べたのち、「暗号」について述べている一葉 (Codex 270, S. 52 [図8-2]) です (非常に簡単ではありますが、ロジャー・ベーコンよりも約400年早く暗号について述べています!)。線や点を用いた「書く暗号」について記したそのあとに、“Clofruna d[icitu]r que pulse efficitur distinctis p[er]sonnis & litteris” という文面がつづきます (図8-3)。訳しにくいのですが、「Clofruna はたたくことで様々な人や文字を表す」くらいの意味です。“Clofruna” は明らかにあの“chloph runa”と同じです。先の「クロップルーネはたたくことで表す秘密の言葉、暗号」という解釈を裏づけてくれていますね。

修道院では、聖堂内や写字室、学校などで常に「静寂」が求められているのですが、どうやら、修道士たちはトントンと机をたたいたりして、こっそり意思疎通を図っていたようなのです。つまり、モールス信号のようなものを使っていたと思われるのです。

問題の「クロップルーネ」に戻しましょう。エッケハルトは、あとからこう書き足すことで、点々の数をたたくことで文字や言葉を表していますよ、とヒントを与えているわけです。改めて見てみましょう。V・X・X・V・VIII・I・XVII・XVIII, つまり, 5・10・10・5・8・1・17・19 (最後尾のところの点々は、ドゥフトによると消えかかっています。デジタル版で見ると、実際ほとんど確認できませんね)。点々の数が最小の1から、最大19まで、少なくとも19種類ありますから、常識的に考えて、アルファベットの順を表していると見てよいでしょう。では当てはめてみましょう。アルファベットの5番目はE。10番目はJ。EJJ ???



図8-1 Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 270, Front cover/Spine/Back cover

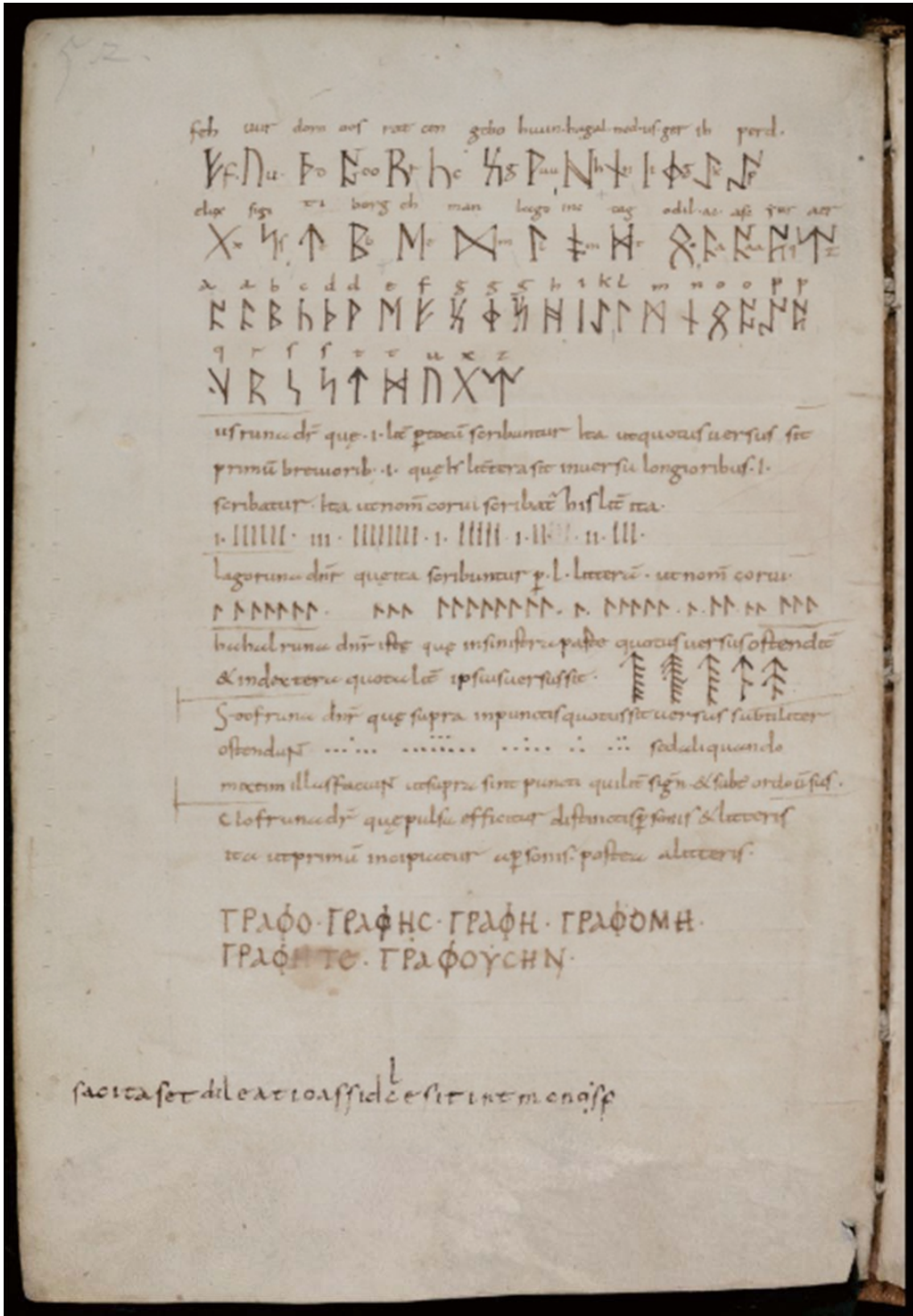


图 8-2 Stifsbibliothek St. Gallen Codex 270, p. 52

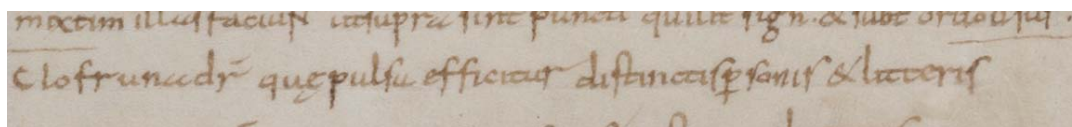


図 8-3 Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 270, p. 52 (部分)

ここでアルファベットの話をしていきますね。多くの方はアルファベットは26文字、と思っているかと思いますが。ローマ字、つまり古代ローマ人が使ったローマ字（アルファベット）は実は23文字です。今日使われているJ・U・Wの3文字はありませんでした。中世の9世紀に書かれた、アルファベットの手本を示したものをお見せします（図9）。J・U・Wはありませんね。では、どうなっていたのかといいますと、まず、「イ」の発音のIは後ろに母音が来ると、イア、イウ、イエ、イォ、となり、母音にも子音にもなる、つまり半母音の役割をします。中世に入り、次第に母音の場合と子音の場合を書き分けるために、Jが作られます。Jの音価はしたがつてももとはドイツ語でおなじみ「イア（ヤ）」行です。Vも同様で、もともとの音価は「ウ」で、ウア、ウイ、ウエ、ウォ、と半母音の役割もします。中世に入り、母音「ウ」のためのUが作られ、また子音としてのVは濁音（ヴ）の音価となり、それにともない清音の「ウア（ワ）」行を表すさいにはUUと書かれ（VVとも）、これがWとなるわけです。

アルファベットはもともとJ・U・Wのない23文字です。これを考慮して、かの、点々を読んでいきましょう。10番目はKです。8番目はH、1番目はA、17番目はR。5・10・10・5・8・1・17まで、EKKEHAR。そして19番目は——、そう、「T」です。エッケハルトはおそらくは、この詩の作者はEKKEHARTですよといっているのです。

かくして、ヨハネス・ドゥフトはこの風刺詩、からかいの詩の作者が、これを書き記しているエッケハルト本人であるということ、この暗号を解くことで、解明し、そして同時にエッケハルトが自分の名前をどう書いたか、Ekkehardか、Ekkehartか、というドゥフト自身の提起した問題を、この暗号を解くことで、Ekkehartであると解明したわけです。

ちなみにハインリヒ・ハッテマーは、といいますと、彼はその著書の脚注で「これ（＝点々のこと）はおそらく名前Ekkehardのことである」としてしまして、答えは正しいのですが、dかtかという問題はヨハネス・ドゥフトとは違って頭になかったのです。半分正解、ですかね。

ヨハネス・ドゥフトの本日紹介しましたこの問いかけ——dかtか——自体は、先ほどもいいましたようにあまり意味があるわけではありません。しかし、ヨハネス・ドゥフトのこのこだわりよは何でしょう？ そこにあるのは、単なる探求心を突き抜けた、それこそ遊び心であるように思われます。遊び心といえば、エッケハルトの書き記したあの一葉も遊び心満載ですね。エッケハルトがあんな漫画チックな絵を描き、そしてからかいの詩を書き、からかい材料の大きな甕を描き、そしてこっそり作者たる自分の名を記す——、これはもう遊び心以外の何ものでもありません。

そして「クロップルーネ」。堅苦しい修道院生活の中で、静寂、静けさが求められる修道院の中で、修道士たちはこの「クロップルーネ」を通して意思疎通、ありていにいうと内緒話をしていたわけで、規律ある厳しい日常の中で、彼らもまた、遊び心を持ち続けていたといえるかもしれません。その遊び、遊び心が彼らの日常に心の余裕をもたらし、ヨハネス・ドゥフトのような研究者（聖職者で

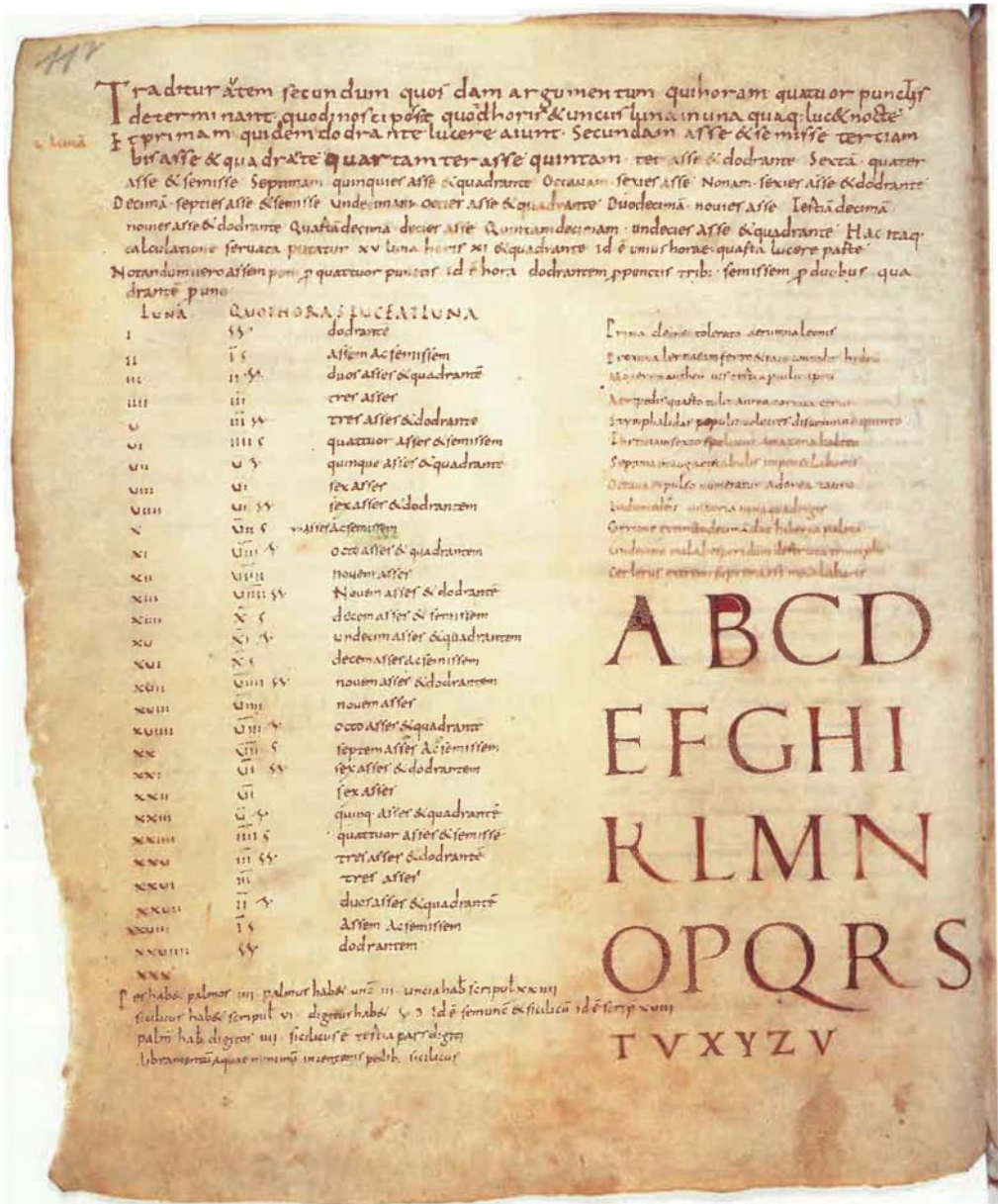


図9 アルファベット「大文字」の手本 (9世紀ころ)

もあった!) の場合, 研究に幅をもたせているように思われます。

本日はヨーロッパ中世の, 主に聖職者たちを中心とする知識人たちの, いわば知的遊びを対象にお話ししましたが, その中世において, 修道士たちに限らず人々の間で, さらにどのような遊びがあり, それが人々の生活とどのようにかかわったのかを解明することは, 今後の課題としたいと思います。

以上をもちまして、私の最終講義を終わりとしたいと思います。本日はご清聴、どうもありがとうございました。

(本稿は2021年3月14日にZOOMで行った「最終講義」を加筆修正して、文字に起こしたものです。ただし当日提示した図版は大幅に削減しました。)

文献・史料

イルムガルト・フェース (津田拓郎訳) 「オットー朝・ザーリアー朝の君主文書における図像的象徴」『儀礼・象徴・意思決定——日欧の古代・中世書字文化——』河内祥輔・小口雅史・M.メルジオヴスキ・E.ヴィダー編, 思文閣出版 2020年, 148-165頁

サイモン・シン (青木薫訳) 『暗号解説 [上]』新潮社 (新潮文庫) 2007年

Johannes Duft, Ekkehardus-Ekkehart. Wie Ekkehart IV. seinen Namen geschrieben hat, in: *Variorum Mvnera Florvm. Latinität als prägende Kraft mittelalterlicher Kultur. Festschrift für Hans F. Haefele zu seiner sechzigsten Geburtstag*, hrsg. v. A. Reinle, L. Schmugge u. P. Stotz, Sigmaringen 1985, S. 83-90. 本論文の骨子は J. Duft, *Die Abtei St. Gallen, Bd. II Beiträge zur Kenntnis ihrer Persönlichkeiten. Ausgewählte Aufsätze in überarbeiteter Fassung von Johannes Duft*, Sigmaringen 1991, S. 211-220 に採録されている。

Heinrich Hattemer, *Denkmahle des Mittelalters. St. Gallen's altteutsche Sprachschätze*, 1, St. Gallen 1844 (S. 412, Handschrift 176. Jahrhundert IX.; S. 417-418, Handschrift 270. Jahrhundert IX.)

e-codices-Virtual Manuscript Library of Switzerland (e-codices. ch). *Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 176, Eugippius, Excerpts from Augustine. Commentaries by Ekkehart IV.* (Parchment, 476 pp., 42 x 28-28.5cm, St. Gall, 9th century)

e-codices-Virtual Manuscript Library of Switzerland (e-codices. ch). *Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 270* (Parchment, 68 pp., 20-20.5 x 13.5-14cm, St. Gall, second half of the 9th century)

図版出典

図1 https://de.wikibooks.org/wiki/Datei:Otto_the_Great_Letter_968.jpg (最終確認 2021年9月25日)

図2 https://de.wikipedia.org/wiki/Karl_der_Gro%C3%9Fe (同上)

図3 <https://www.aubing1000.de/Urkunde.htm> (同上)

図4 http://digital.onb.ac.at/RepViewer/viewer.faces?doc=DTL_7223619&order=1&view=SINGLE (同上)

図5 http://digital.onb.ac.at/RepViewer/viewer.faces?doc=DTL_7223619&order=1&view=SINGLE (同上)

図6 https://digi.vatlib.it/view/MSS_Reg.lat.124 (同上)

図7-1~7-4 上記文献・史料 e-codices, Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 176

図8-1~8-3 上記文献・史料 e-codices, Stiftsbibliothek St. Gallen Codex 270

図9 岡地稔『あだ名で読む中世史』八坂書房 2018年, 141頁